
真・恋姫†無双～転生者観察日記

無気力

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜転生者観察日記

【Nコード】

N4091P

【作者名】

無気力

【あらすじ】

テンプレで死んだ主人公が恋姫の世界で、チート能力を駆使して生きていく物語りです。

ルートは、好きな呉ルートでいきたいと思っています。

小説を書いたことのない高校生が書くものなので物凄い駄文です。

プロローグ（前書き）

初めまして、無気力です。

ちなみに高校生です。

初めて小説を書くので、どういつ感じで書けばいいのかすらわかりません。

なので物凄い駄文です。

誹謗・中傷などは、やめてください。

一生立ち直れないので・・・

ブローグ

「本当にすいませんでした!!」(どうしてこんなことに・・・) この男桐生飛鳥は、目の前でひたすら謝っている女性(美人)を見ながら、さつき起きた出来事を思い出す。

飛鳥 side

「はー、今日も疲れましたね」と言っているのは、バイト終え、家に帰っている途中の大学一年生、桐生飛鳥である。

家に帰るためにしばらく歩いていると「・・・えっ!？」

何気なく後ろを振り向いた飛鳥の目に映ったものは、時速150キロくらいはでている4トトラックだった。

<ちよっ、あのトラックスピードだしすぎでしょここ制限時速40キロですよ!!!>

<あれ?なんかあのトラック一直線にこっちに向かっているような・・・ぎゃあああああ>

ズガーーーーーン

「たしかこんなことがあったような・・・!!!あっ、もしかし

て俺死にましたか!？」

「その通りです」

目の前にいる女性が申し訳なさそうに言う。

「というよりあなたは誰ですか？」

「神様です」

「ええっ!じゃあここ天国ですか？」

「違います。ここは、神の間です。」

「なんでそんなところに俺がいるんですか？」

「すみません私のミスでああなたの寿命を消してしまいました。」

「えええっ!じゃあ俺どうなるんですか!？」

「すみませんがあなたには、転生してもらおうと思います。」

「生き返らせてくれないんですか？」

「すみません、それはきまりで、できないんです。それにあなたの肉体の損傷も激しいので・・・」 「まあ、あのスピードのトラックに轢かれるとミンチですよ・・・」

「分かりました、転生させていただきます。」

「ありがとうございます。早速なんですがあなたが転生する世界は、三国志のせかいです・・・なぜか有名な武将が全員女性なんですがええっ!!!全員女性ってどういうことでしょう!？」

「というより、三国志の世界に行っても生き残れる自信がまったくないんですが・・・」

「それは大丈夫です。死なせてしまったおわびにあなたには能力を与えるので。」

「能力ってなんですか？」

「身体能力の上限を取り除くことと、圧倒的な剣と気の才能あととはどんな毒や病気でも死なない能力です。」

身体能力の上限取り除くって鍛えれば鍛えるほど強くなるってことですよね？

「物凄い

チートですね!？」

「はい。あと武器もあとから送るので、頑張れば生き残ることがで

きるのでそれでは早速、いつてらしゃい」

「えっ!？」

あれなんか床に穴があいて・・・」「ぎゃああああ何この浮遊感気持ち悪っ!」

その浮遊感10分ほど味わい気が付くと・・・

「おぎゃああああああ(転生だから赤ちゃんからやり直しのわすれてたあああああ)」

第一話（前書き）

学校のテスト中に問題を解くのをあきらめて書きました（笑）
駄文ですが見てください

第一話

えゝどうも異世界に転生した 元 桐生飛鳥です。

そして今の名前は、性は凌、名は統、字は公績、真名は飛鳥です。
真名ってなんだろう？

まあ、いつかわかりますよね？

そして、目の前には自分の母親である凌維（真名は、桜花）と父親の凌操（真名は、龍牙）がいる。

「いやゝしかし飛鳥は、かわいいなゝ」

いやお父さん頼ずりしないでください。

髭がいたいです。

ちよつ、ほんとに痛いマジで髭がささってるから。

「ほんとにかわいいなゝ」

ブチッ

「ばぶうー！ー！ー（いい加減離せやボケー！ー）」

ガスッ

飛鳥の攻撃＜会心の一撃＞

「ぎゃああああああ」

龍牙の眼球に当たった龍牙は倒れた。飛鳥は、20の経験値を手に入れた。

タラララッラッラー

飛鳥はレベルが上がった

目潰しを覚えた

「バブッ？（ん？今レベルが上がったような・・・気のせいかな）」

「まあ、飛鳥は、元気がいいですねゝ」

「そうだな桜花」

「バブッ！！！！（回復早っ！！！！）」

「飛鳥ご飯ですよゝ」

そついえばお腹すいたなゝ。ご飯なんだろう？焼き魚が食べたいな

」。

「今、母乳あげますからね」

「ばぶ？（えっ？）」

そつえば、俺今赤ちゃんじゃないですか！！

そんなことを考えてるうちに母さんはもう授乳の準備ができたよう
だ。

母さんって、中々巨に……ゲフンゲフン、そんなことを考えてる
場合じゃなくてまじでどうしにかしな

「はい、どうぞ」と？

もう母さんが目の前にいた……。

「ばぶーーーーー（いやあああああ）」

……もうやだ。

すごいはずかしかったノノノ。

精神年齢20の男が母乳を飲むって何のプレイですか？

「ばぶ~~~~（は~~~~、鬱になりそうです）」

色々あって疲れましたもう寝よう……あつ寝る前にちょっとト
イ・レ……に。

「ばぶーーーーー（一人でトイレいけないじゃないですかーーーー）」

「

「あら？飛鳥漏らしたのかしら？」

えっ？ちよつ、母さん違つ、やめ、いきなり下おろさないでー

「ばぶーーーーー（らめえええええええ）」

どうも、2年ほど数々の羞恥プレイに耐えすくすく育った飛鳥です。
今は5歳です。

えっ時間がとんだ？そんなの屑（作者）に言ってください。

・・・何か変なことをいったような？

気のせいですね♪

あれから5年間自分のチート能力（身体能力上限無し）を存分に活用しています。

赤ちゃんのときから両親に隠れてこそこそ筋トレをしました。おかげで大人に勝るとも劣らない力を手に入れました。

後、真名はそのひとが認めた人しか呼んではいけないそうです。もし勝手に真名を呼ぶと、殺されても文句は言えないそうです・・・ブルッ、恐ろしい文化です。

そして俺は今、鍛錬がてら村から少し離れた山に山菜を採りに来ています。

「ふふふ」

「しかしたくさん採れましたね。」

「ガルルル」

「ん？」

「！！！！」

少し離れたところで桃色の髪の毛の子が狼に襲われてる！
助けなくちゃ！

「バキッ」

俺は駆け寄り狼を殴りとばした。

狼は、5メートルくらい吹き飛ばされ気絶したようだ。

5歳でこの力、やっぱりチートですね〜などと考えながら女の子に声をかけた。

「大丈夫ですか？」

side 桃色の髪の毛の子

今日私は、お母さんに頼まれて山に薬草をとりにきた。

「思ったよりたくさん採れたな〜」

薬草を採り終え帰ろうとしていると目の前に1匹の狼があらわれた。
逃げなきゃ。そう思い私は、走ろうとするが焦ってこけてしまった。

「ガルルル」

ふえええ、もうだめだと思い目を瞑っていると

「バキッ」

と音がし、目をあけてみるとそこには、気絶した狼と同年くらいの
一人の男の子が立っていた。

「大丈夫ですか？」

「ふえっ、あ、ありがとうござます／＼」

かっこいい男の子だなあ／＼

「どうしたの？顔が赤いけど、どこか痛いのか？」

「ふえ、だ、大丈夫ですっ。」

私は、男の子に見とれていたようだ／／・・・顔が赤くなったのも見られちゃった／／／

その後男の子は、私の村まで送り届けてくれた。

私は、家に帰りその男の子の顔を思い出していた。

「かつこよかったな／／／」

「焦ってて名前聞くの忘れちゃったけど・・・また会えるといいな／／／」

side out

side 飛鳥

今日助けた女の子かわいかったなあ、などと考えながら村に帰っているとふと思い出した。

「そつえば神様が後から武器を送るって言ってたけどいつくるのかな？」

「早く剣の修業がしたいなあ」

そう呟きながら、自分の村へ帰って行った。

第二話（前書き）

学校のテスト勉強をしなければ・・・。
テスト期間真っ最中ですが書きました。
今回も駄文ですが、一生懸命書いたので見てください。

第二話

どうも転生した飛鳥です。

きたる乱世に備えて必死に鍛練しています。

今日は、村の近くの山で鍛練しています。

「よし今日は、昔やっていたテコンドーの技の練習でもしましょう
！」

じゃあ最初は、ハイキックでもやってみましょう。

たしか足を後ろに少し下げて、腰の捻りを利用して相手の頭を蹴りぬくんでしたね。

”ビュンツ”

「え？」

凄い音ですね・・・さすがチート

ちゃんとした技をやるとここまで威力が出るんですか

そんなことを考えながら他にも前蹴り、回し蹴りなど色んな蹴り技を練習していると

<<お久しぶりです>>

「ウワツ！、誰ですか？」

いきなり声が聞こえてきて驚きながらも辺りを見回して見るが誰もいない。

「？」

幻聴ですかね、最近少し疲れていますし。

<<幻聴じゃありません>>

「ウワツ！、また聞こえましたね！？」

<<私です>>

「私って言われてもわかりません。」

「それにまず、どこにいるんですか？」

もう一度辺りを見渡すがやっぱり誰もいない。

<<神様です。そして今あなたの頭の中に直接話し掛けているので

そこにはいませんよ。>>

「頭の中に直接話し掛けるって・・・まあ神様なのでそれくらいはできますか」

「で、どうしたんですか？武器を持って来たんですか？」

「はい、しかしはまだ身長的に早いので、とりあえず子供用の武器を持って来ました。」

「ありがとうございます。」

「いえ、それでは、そちらに送りますね。」

”ピカッ”

目の前がいきなり光ったかとおもうとそこには、刃渡り40センチ位の無装飾の片刃の剣が刺さっていた

「では、この剣は頂いてよろしいんですね？」

「はい。それでは私はもう戻らせてもらいますね？」

「はい」

「それではさようなら」

しかし、剣を貰ったのはいいですが剣は使ったことがないので、だれかに剣の使い方を教えてもらわないと・・・どうしよう

「とりあえず家帰って父さんにでも聞いて見ますか。」

などと言いながら山を後にした。

「ただいま」

「お帰りなさい飛鳥、あれ？その剣はどうしたんですか？」

「やばっ、どうしよう言い訳考えてなかった。」

「どうしよう、神様にこの剣貰ったなんて言ったら頭の痛い子になってしまう・・・」

「え、えっ！つとこの剣は、山に落ちてたんで拾ったんです。」

「そうですか・・・それではその剣はどうするんですか？」

「よしっ、なんとかごまかせた。」

「この剣で修業したいです。」

「そう・・・なら私が稽古つけてあげましょうか？」

「えっ？」

「母さん剣使えるの!？」

「ええ、昔将をやっていたから」

「ええっ~~~~!!」

まさか母さんが将をやっているなんて思いもしなかった。

というか母さんの見た目は、とても細く華奢だ。

本当に戦えるのかな？

「戦えますよ」

心が読まれたっ!？

「読んでませんよ？」

「いや、やっぱ読んでますよ!？」

「それより稽古は受けるのですか？」

「それよりって、心読めるって物凄い事だと思っんですが・・・ま

あ、稽古は受けたいです。」

「分かりました。それでは早速始めましょう」

あれ？

心なしか母さんが楽しそうに見える・・・大丈夫ですよね？

母さんについていくと、いつもさっきまで鍛練していたところについていた。

「この辺りがちょうどいいですね・・・では、始めましょう。」
「言いながら母さんは剣を抜いた。」

「はい!」

そして俺も剣を抜いた。

「では、母さんに切りかかってきなさい」

と母さんは言うもののまったく隙が無い。

正直どこを攻めても反撃される事しか想像できません……。

等と考えていると母さんが

「攻めて来ないならこっちから行きますね」

そう言つて母さんが横なぎに剣を振った。

”ヒュン”

風を切る音がしたかと思うと剣が目の前に迫っていた。

「うわっ！」

俺は、とつさにしゃがんで剣を避けた。

「母さんっ!？」

「どうかしましたか？」

「どうもこうもどうしていきなり首狙うの!？殺す気ですか!？」

「大丈夫よ、ちゃんと刃引きしてあるから」

と言いながら俺に微笑んでくる

正直めちゃくちゃ恐いです……ブルツ

と言うよりいくら刃引きしていても首の骨がおれますよ!？

「今のを避けるなんてやつぱり飛鳥は、才能がありますね」

いや、母さん今その才能を自分の手で潰しかけたんですよ!!!

「それじゃあ今度はもっと速くしますね」

「え？」

「それじゃあいきますよ」

「ちよっ、待つて母さんあれより速くしたら本当に”ブウン”死・

ぬ？」

「これも避けれるんですか……飛鳥は、本当に才能が有るんです

ね」

「ちよっ、母さん俺今話してる途中ですよね？」

「次は、連続で逝きますよ」

嗚呼、今日が俺の命日になりそうですね・・・

第三話（前書き）

凄い疲れました。

自分なりには頑張りました。

まあいつも通り駄文ですが・
・。

第三話

お久しぶりです飛鳥です。

今8歳です

えっ？

また時間がとんだ？

だからそれは、屑（作者）に言ってください。

あの母さんの稽古に^{イジメ}

耐えること3年今では、母さんとの稽古で3回に1回ぐらいは勝てるようになりました。

そして今もその稽古をしています。

”ガキン” ”ギャイン”

「ハアッ！セヤッ！」

鋭い声とともに金属のぶつかり合う音が響く。

俺は、母さんの横なぎの攻撃をバックステップで避け、袈裟切りを放つ。

母さんは、それを受け流し突きを放ち俺はそれをなんとか左に跳んで避ける。

「ふう、飛鳥は本当に強くなりましたね。」

「今日はこの辺で終わりにしましょう」

母さんは、そう言い剣を下ろす。「桜花〱、飛鳥〱飯ができたぞ〱」
父さんが来たようだ。

俺と母さんが鍛練をしているときはいつも父さんがご飯を作っているの、父さんはまるで主夫のようになってきている。

まあ父さんは、鍛練にまざれないから。
ん？

どうして？、ですか？

それは父さんが弱過ぎるんですよ・・・。

母さんとの鍛練を始めた後すぐに

「俺も稽古つけてやろう！安心しろ手加減はするから。」

などと言って鍛練に参加してきて5歳のときの俺に剣を使われることなく瞬殺されましたからね……。

父さん、弱すぎるよ……。

それ以来父さんは鍛練に一切参加することはありませんでしたね。

「飛鳥、帰るぞ。」

「はい」

家に帰って家族揃ってご飯を食べていると

「逃げろー！賊が来たぞー！」

と叫びながら村の若者が逃げている。

俺と母さんは同時に剣をとった。「飛鳥、あなたはみんなと一緒に逃げなさい！」

と母さんは言うが

「嫌です！俺も一緒に村を守ります」

俺は、本気でこの村を守りたかった。

二度目の人生とはいえここが俺の生まれ育った場所には変わりはないのだから。

「……分かりました。着いてきてください」

母さんはそんな俺の覚悟が伝わったのかついて来ることを承諾した。

「龍牙さん、あなたは村の人の避難の誘導をしてください。」

「わかった。」

そう言い父さんは村の人の避難の誘導に行った。

「飛鳥行きますよ。」

そして俺と母さんは村の入口に向かった。

村の入口には、30人程の賊がいた。

「こんなことをしていると官軍に捕らえられてしまいますよ。」
と母さんが説得を試みるが

「ハッ！関係ねえよ。」

「頭あ、こいつ結構いい女ですよ。」

「そうだな。連れて帰ってたっぷり楽しもうぜ。ギャハハハア。」
賊が下卑た笑い声をだす。

これは、本当に腹が立ちますね・・・。

「まあ、そのためにはその餓鬼が邪魔だな。さつさとその餓鬼始末して連れて帰ろうぜ。」

そう言い賊が武器を構える。

「飛鳥、いけますね？」

「はい、勿論。」

そう言つと賊が一斉に襲い掛かってきた。

賊の一人が斬り掛かってきた。

俺はそれを受け流し賊の首に剣の峰で一撃いれる。

やっぱり、賊とはいえ殺すのは躊躇いますね。

そんなことを考えているとまた一人斬り掛かってきた。

今度は、それを避け相手の懐に入りこみ拳で鳩尾に一撃入れる。
そして後ろから襲い掛かってきたやつには肘鉄を入れる。

賊を15人程気絶させたところで母さんのほうを見ると、母さんも
15人程賊を斬っていた。

その時足元にいた斬られた賊が傷が浅かったのか腕を伸ばし母さん
の足を掴んだ。

その隙に母さんは

「死ねえ！」

賊に斬られた・・・。

一瞬何が起きたか分からなかった。

しかし、すぐにそれを理解した。 母さんが斬られた・・・。
それを理解したと同時に俺の中の何かが切れた・・・。

S i d e 賊

最初は、餓鬼一人と女一人なんかすぐに殺せると思っていた。
けど違った。

女は剣で流れるように俺の仲間を斬っていき、餓鬼の方は餓鬼と
は思えない動きで俺の仲間を倒していった。

仲間が半分以上やられた。

やべえ！！

このままじゃこっちが殺される
と思っていたとき。

死んだと思っていたやつが手を伸ばして女の足を掴んだ。

女にできた一瞬の隙をつき

「死ねえ！」 俺は女を斬った。

へっ、これであとはあの餓鬼だけだと思って餓鬼の方を向こうとすると手に激痛が走った。

「ぐああああ」

俺は自分の手を見てみると、手首から先が無かった。

そして餓鬼の方を見ようとしたがそこで俺の意識は途切れた。

S i d e O u t

S i d e 飛鳥

俺は母さんが斬られたあと賊の方へ向かい手を斬り落とした。

「ぐああああ」

手を斬られた賊は俺の方を見ようとしたが俺はその賊の首を斬り落とした。

「うわああああああ」

俺は叫びながら残りの賊を斬り殺していった。

俺は賊を全員斬り殺したあと母さんに駆け寄った。

「母さん！！」

俺が呼ぶと母さんは

「大丈夫です。傷はそこまで深くありませんよ。」

と言った。

「良かった・・・。」

俺は母さんが生きていることに心から安堵した。

「おい大丈夫か？」

そうこうしている内に父さんが来た。

「！！！！、桜花大丈夫かっ！？」

父さんは母さんが斬られたことに気付いたのかこっちに走って来た。

「大丈夫ですよ龍牙さん。」

と微笑みながら答えた。

「そうか、良かった。」

母さんが生きていることが分かり父さんも安堵したようだ。

「とりあえず、桜花を医者に診せよう。」

そう言い母さんを背負っている父さんと一緒に俺は村に戻った。

賊が来てから数日俺はほとんどご飯を食べずに部屋に籠っていた。

「俺は人を殺したんですね・・・。」

俺の手にはまだ賊を斬った時の生々しい感覚が残っていた。

「飛鳥、話があるので来て下さい。」

母さんが俺を呼ぶ声がした。

桜花 Side

私は、数日前に来た賊に不覚をとり斬られてしまった。

しかし傷は浅かったので命に別状はありませんでしたが私は、斬られた後、飛鳥が賊を斬り殺していくのを見ました。

あの子は、賊を殺したことに怯えほとんど食事も採らずに部屋に籠っている。

「やっぱり、始めて人を殺すとあんな風になるのは無理もありませんね……。それに、いくら強いとはいえまだ8歳なんですから……。」

あの子と少し話しをする必要がありそうですね。

私は、飛鳥の部屋の前に行き

「飛鳥、話があるので来て下さい。」
と言った。

Side Out

飛鳥 Side

俺は今母さんと向かい会っている。

「飛鳥、あなたは賊を殺したことを悔いていますか？」
母さんが俺に聞いてきた

「……………はい。」

俺は答えた。

「飛鳥、あなたは悔いる必要がありません。あなたは私を助けるために殺したのですから。」

母さんがそう言った。

「しかし、殺したのは事実です。殺したということだけは忘れてはいけません。」

俺は母さんの”殺した”と言う言葉に吐き気がこみあげてきた。

「だからあなたは背負わなければいけません。」

「背・負う・で・すか？」

「そうです。あなたはあの人の”死”を背負わなければいけません。あの人の死を背負い、あの人の命を噛み締め、あの人のぶんも幸せに生きなければいけません。それが命を奪った者の責務です。」
命を奪った者の責務・・・俺はその責務を今果たせていませんね・・・。

「分かりました。俺はその責務を果たすため人の死を背負い生きて行きます。」

「はい。わかればいいですよ。・・・でも辛ければ泣いてもいいんですよ？」

「うわああああん」

俺は母さんの胸の中で泣いた。

そしてこの日俺は、もう大切な人が傷つかないようにするために強くなることを誓った・・・心も身体も・・・。

第四話（前書き）

変換ミス一カ所見つけました。

気になりすぎたので訂正しました。

第四話

どうも飛鳥です。

初めて人を殺したあの日から8年たちました。

あの日誓った通り強くなるため数々の鍛練をこなしてきました。

・・・まあ、何度か死にかけましたが。

しかしそのおかげで力は超チートで、石を思い切り握ると砂になります。

更に母さんに習い気が使えるようになりました。

気って凄いですね。

まさか武器に纏わせたりできるなんて。

そんな力がチートな俺は今、土下座をしています。

えゝ何故こんなことになったかと言うと・・・

「フウツ、今日も疲れましたね」

そう呟きながら、鍛練を終え休憩し最近の悩みについて考えていました。

「やっぱり、母さんと鍛練するだけじゃ技量がこれ以上上がりませんね・・・」

それに最近、黄巾党と言う名のぞくが現れ始めているらしいですし。・・・黄巾の乱も近そうですね。たしか黄巾の乱が終われば群雄割

抛の乱世でしたね・・・。

やはりこれは、何処かに士官したほうが良さそうですね。

「そうだ！―それではまず何処に士官するか決めるために旅に出ましよう。」

では、早速両親に話してみましよう。

家にかえり

「ちよつと話があるんですが」と、父さんと母さんと呼んだ。

「父さん、母さんいきなりだけど旅に行かせて下さいっ」

と言い土下座をした。

と、まあ、こんなことがありまして今両親の返事を土下座しながら待っている状態です。

「飛鳥、どうして旅に出るんだ？理由を聞かせてくれ。」

と、父さんが聞いてきた。

「最近、世が乱れてきているので、このままでは確実に乱世になります。だからそれに備え強くなるために、そして自分が士官すべき主を探す為です。」

け、決して、女性になつているこの世界の武將に会ってみたいと思つた訳じゃありませんよつ。

「そうかそこまで考えているのなら俺は反対しない。桜花も良いよな？」

「私は元々飛鳥が決めたことには反対しませんよ」

「えっ？じゃあ旅に行っても良いんですか！？」

「ああ（ええ）」

「ありがとうございます！！」

これでこの世界の武將にーゲフンゲフン、自分が士官すべきくに探すことができますね。

「それで、いつ旅立つんだ？」

と、そんなことを考えている俺に聞いてきた。

「明日、出発しようと思っています。」

「急だな」

「すみません……。」

「気にするな。……桜花、今日は村の皆と宴会でもしようか！」

「ふふ、そうしましょう。」

そうしてこの晩村の皆と一緒に宴会をした。

皆少し悲しそうに色々別れの言葉をかけてくれた。

「ふう、しかし旅の前日に興奮して寝れないなんて、遠足前日の小

学生みたいですネ・・・」
「そうだ！」

しばらく帰りませんし、いつも鍛練している山にでも行きますか。

「はあ、しばらくここにこれないとなると寂しいですね・・・」
と感傷に浸っていると

<<お久しぶりです♪>>

「誰ですか!？」

あれ?前にもこんなことがあったような・・・。

<<神様ですよ♪>>

「あつ!!久しぶり過ぎて完全に忘れていました。」

<<酷いですね、まあいいです。それより武器持ってきましたよ
>>

「えっ?本当ですか!？」

<<はい。それではそっちへ送りますね♪>>

”ピカッ”

「眩しっ」

眩しいので目を閉じ、光がおさつまってから眼を開けるとそこには
二本の刀と一本の身の丈程ある刀身が真つ黒の片刃の剣があった。

<<では武器を送ったのでかえりますね?さようなら♪>>
帰るの早いな・・・

「まあそんなことより武器ですね」

この刀は二刀流で使うのでしょうか？

とりあえず名前は、”白光”（ビヤッコウ）と”黒天”（コクテン）にしましょう。

そして、この黒くて長い片刃の剣は、”孤月”（コゲツ）にしましょう。

「名前も決めたのでとりあえず帰りますか・・・。」

そして俺は白光と黒天を左右に腰にさし、孤月を背中に背負い家に帰ってた。

「身体、気をつけるんだぞ？」「はい」

「忘れ物は無いですか？」

「大丈夫です。」

飛鳥です。

村の入口で今両親との別れをしています。

「それじゃあな！」

と手を振る父さん

「はい」

「時々、帰ってくるんですよ？」「はい。わかりました。」

「父さん、母さん行ってきます！」

と、言い両親に背を向けて歩きます。

「しかし、何処の国に士官しましょうかね」
そんなことを呟きながら旅をする飛鳥だった。

第五話（前書き）

つ、疲れた・・・。

そろそろテスト勉強しないと・・・。

そんなことを思いながら書きました。

いつもどおり駄文ですが頑張って書きました見てください。

第五話

俺が旅に出て数日たちました。

今は、森の中を歩いている。

そして最近、あることに気づきました。

それは……

「地理が全く分からないじゃないですか……!!!」

ハア、意気揚々と旅に出たのはよかったんですが目的地の何も決めてないので何処に向かえば良いのか分からないじゃないですか……。

「とりあえずこの森をぬけますか……」

と呟いたその時、

「おい兄ちゃん、命が惜しけりや身ぐるみ全部置いていきな」

20人程の山賊が現れた。

「嫌です。」

そう俺が答えると賊は

「てめえ、命がいらねえみたいだな。野郎どもやつちまえ。」

と山賊の頭？が言つと

「……おうつ!」「……」

と答え一斉に襲い掛かってきた。「ハア、仕方ありませんね……
ついでに武器の性能も確かめますか。」

と言い、俺も腰の白光と黒天にてをかける。

「おらあ!」

賊の一人が突つ込んできた。

俺は、それに白光を抜き放った。"ヒュオン"

と鋭い風を切るをとがし、突つ込んできた賊の首を斬り落とした。

「うおっ!思つた以上にこの刀は軽いですね。」

白光は他の剣とは比べものにはならないほど軽かった

これはスピード重視の武器ですね・・・。

などと考えて、今度は相手が斬り掛かってくるより先に黒天で袈裟斬りを放った。

” シャリン ”

と音をたてて黒天は賊を剣ごと切り裂いた。

「こっちは凄まじい切れ味ですね。」

と呟きながら白光と黒天を両手にもち次々と賊を斬り伏せていった。
「て、てめえらたった一人相手に何してやがる！相手は一人なんだから全員で囲んどまえ！」

と言い、賊の頭？と残りの手下十人近くが俺を囲んで一斉に斬り掛かってきた。

” バキバキバキン ”

俺はそれに孤月を抜き、円を描くように周囲を薙ぎ払った。

孤月は襲い掛かってきた賊の武器をへし折りながら賊の胴体を真つ二つに切り裂いた。

周りは真つ二つの死体が転がり血の海になっている。

「ふう、賊とはいえ人を殺すのはやっぱり嫌ですね・・・。」

その後賊を全て埋め墓を作った

「来世では善人になつて下さいね？」

と賊の墓の前で呟き森を抜けるためその場を去っていった。

しばらく歩き森を抜けると村が見えてきた。

「旅立ってから始めての村ですね。」

けっこう大きい村ですね・・・

とりあえず村に入って食事でもとりますか・・・。

そう思い村に向かっていった。

村に入り今、村の食堂にいる。

「すいません、炒飯と麻婆豆腐一つ」

と店員さんに頼んだ後、改めて店内を見回すと槍を持った青い髪の人をやたらとメンマを食べていた。

うわぁ……。あの人凄い量のメンマ食べてますね。

などと思っているうちに自分の頼んだ炒飯と麻婆豆腐がきた。

しかしこの世界は不思議ですね……。

なんで三国時代にこんな料理があるんでしょう？

まあ有名な武将が全員女の人になってる時点でおかしいですが……。

「まあ、考えても仕方ありませんね。とりあえず食べますか……」
と言い食べ始めた。

美味しいですね。

と思い食べていると、

「賊が来たぞー」と村の人が走りながら叫んでいる。

「ハァ、ゆつくり食事もできないんですか……」

ついてませんね……

「あんたもお代はいいからさっさと逃げな!!」

と俺が落ちこんでいる所に店の主人らしき人が言ってきた

店の主人は俺にそう言い逃げて行った。

ラッキー♪儲けましたね

俺は残りをさっさと食べて賊を追い返そうと思い村の外に歩いて行

った。

俺は、村の外に向かっている最中に二人の女性に出会った。

「お兄さん、賊がきているので早く逃げたほうがいいですよ」

「そうです、早く逃げてください！」

と頭に人形を乗せ飴をなめている女の子と真面目そうな眼鏡をかけた女の人と言ってきた。

「いえ、俺は賊を追い返そうと思ひまして。」

「何を言っているんですか！？殺されてしまいますよ！」

「そうですよ、星ちゃんが時間を稼いでる間に逃げたほうがいいですよ」

「大丈夫ですよ、では俺もいつてきますね。」

俺はそう言い歩きはじめた。

村の外に行くと1000人程の賊とさっきの食堂にいた青い髪のやたらとメンマを食べていた人がいた。

「フツ、フツ、ハアツ」

と叫びながら青い髪の女は槍で流れるように賊を貫いていった。

しかし賊を倒していく一方、倒れていった賊が青い髪の女の人の周りに積み上がって 足場をどんどんなくしていった。

「あれはまずいですね。急ぎましょう。」

俺は賊に向かっていく速度を上げた。

S i d e 青い髪の女

「フツ、フツ、ハアツ」

と叫びながら私は賊を貫いていく。

「女一人相手に何してやがる！全員で一斉にかかるぞお！」

と賊の一人が言う和一斉に突っ込んできた。

「ハアツ！」

私はそれを横薙ぎに切り裂いた。次々賊を倒して行くがどんどん賊が襲い掛かってくる。

「クツ・・・」

賊の死体が徐々にと私の足場をなくしていく。

「ハアツ」

賊が斬り掛かってきた

私は、それを避けようと後ろに下がるが賊の死体に足をとられ転んでしまった。

「死ねえ！」

と言い賊が剣を振り降ろした
私は死を覚悟し目を閉じた。
・・・しかし一向に痛みはこない。
不思議に思い目を開けるとそこには両手に細い片刃の剣を持ち背
中に長い剣を背負った男が立っていた。

Side Out

飛鳥Side

女の人の所にたどり着くとそこには死体に足をとられ転んでいる女
の人と剣を振り上げている賊がいた。

”ダッ”

俺は全力で走りながら白光と黒天を抜き賊を斬り伏せた。

「大丈夫ですか？」

と聞くと、

「すまない、助かった。」

と少し驚いたような表情で礼を言ってきた。

女の人は直ぐに立ち上がり槍を構えた。

「私の名前は趙雲 子龍。さっきは助かった。」

と名乗りながら賊に槍を振るう

えっ？

ちょ、趙雲！？

この人があの有名な！？

と内心驚愕しながら

「俺の名は凌統 公績です。」

と名乗った。

「ハアッ！、とりあえずこの賊を全て片付けましょう。」

と俺が言う。

「ああ、あなたに背中を預けるならなんの心配もない。」

と趙雲さんが言うてきた

あの趙雲さんにそんなことを言うて貰えるなんて凄い嬉しいですね♪

と内心テンションが上がっている俺は

「それでは行きましょう！！！」と言い賊に斬り掛かっていく

趙雲さんに褒められ、テンションの高い俺は

「ハアッ！」

と賊を次々斬り伏せていく

S i d e O u t

趙雲S i d e

あんな賊に不覚をとるなんて・・・。

と思いながら賊を突き伏せていき

凌統殿はどうなっているのだろうと見てみると・・・

目にも留まらぬ連撃で賊を斬り、片方の剣は賊の武器ごと賊を斬り
さいている。

「凄まじいですな・・・」

と呟き

「負けていられません・・・常山の趙子龍推して参る！」

Side Out

飛鳥Side

「ふう、疲れましたね・・・」今はもう全ての賊を倒し村に帰っ
ている途中である

「凌統殿、凄い武でしたな」

と趙雲さんが褒めてくれた

ヨッシャアアアア！！超嬉しいiiiiiii！！

と内心で叫んでいると

「凌統殿、私の真名を預かって貰えないか？」

「えっ！？いいんですか」

と俺が驚くと

「ああ、私の真名は星だ。」

「じゃあ俺の真名は飛鳥つていいです。よろしく星さん。」

「こちらこそよろしく飛鳥殿。」そうして俺と星さんは真名を交換

し村に戻って行った。

主人公設定（前書き）

すみません、どういった感じでやれば良いのか分からず適当です。

主人公設定

主人公設定

名前 凌統<リョウトウ> 公績<コウセキ>

身長 175cm

体重 60

顔立ち

黒髪で端正な顔立ち

BLACK CATのトレインみたいなかんじです

能力

身体能力の上限無し

圧倒的な剣と気の才能

毒や病気で死なない

武器

白光 見ためは刀で、柄が白色

とても軽い

黒天 みためは刀で、柄が黒色

切れ味がとても良い

孤月 身の丈程の長さの片刃の剣 全体的に黒色

ONE PIECEのミホークが持

っ

ている剣を想像すると分

かりやすいと思います

戦闘スタイル

基本的に白光と黒天を使って戦い、相手の人数が多いときや本気をだすときは孤月で戦います。

第六話（前書き）

明日期末テストですね・・・。

この土日一切勉強していません・・・テストなんてなくなればいいのに。

今回はそんな現実逃避をしながら書きました。

原作キャラの口調がわかりません・・・。

そしていつも通り駄文です。

こんな小説ですが読んでください。

第六話

村に着くとさつき会った二人組の女の人がかつちに向かつて歩いてきた。

「星殿、無事のようですね」

と眼鏡をかけた女の人が安心したように言った

「あれ？さっきのお兄さんじゃないですか。本当に戦いに行っただんですか」

と頭に人形を乗せた女の子が行った

・・・本当に戦いに行った、って俺はそんなに強そうに見えないんですかね・・・

と軽く凹んみながら

「俺の名前は凌統 公績です」

と自己紹介をすると

「風の名前は、程イクですよ」「私の名前は戯志才と言います」と二人も自己紹介をしてきた

「そういえば、飛鳥殿はこの後どうするのだ？」

と星さんが聞いてきた

「そうですね、とりあえず今日はこの村で宿をとろうと思っていますね。」

などと話していると

「すみません、あなたたちが賊を追い返してくれた方達ですか？」

と老人が尋ねてきた

「そうだが、いかがなされたか？」と星さんが尋ねると

「ありがとうございます。私はこの村の村長をやっている者です」と言った

「あなたたちが賊を追い返してくださったお陰で村に被害はありませんでした。なのでそのお礼させていただきます。」

と村長が言ってきた

「ふむ、ではお言葉に甘えて今日の宿を用意してくれませぬか？」
と星さんが言った

「そんなことでいいのならいくらでもさせていただきます。」

と言いつつ村長わ宿の準備をするために去っていった

「飛鳥殿、この後何か予定はあるのですかな？」

と星さんが尋ねてきた

「この後は、特には無いですね」

と答えると

「なら、一度手合わせに付き合っ頂けないか？」

と言ってきた

ハア、適当に用事を作ればよかったですね・・・

と思いながら

「分かりました・・・」

と渋々了承した

「なら適当に広い場所行こうか」

「分かりました。」

と言いおれと星さんは歩きはじめた

「此処なら大丈夫であろう。さあ飛鳥殿、始めよう」
と言いつつ星さんは槍を構える

ハア、あの趙子龍と手合わせって、生きていられますかね・・・。

「そういえば、何故程伊くさんも来たのですか？」

と、俺が聞くと

「風は、お兄さんの武を見てみたかったのですよ」
と答えた

「そうですね。そんなたいした物じゃないと思いますけど・・・」
まあ今、自分の武がどれほどか知る良い機会です

「始めましょうか」

そう言い俺は白光と黒天を抜く

「そういえば飛鳥殿は、背中の剣は使わないのですかな？」
と聞いてきた

俺は、孤月は基本的に使いません。

孤月は重くて破壊力が凄まじいので、多対一か本当に強い相手にしか使えないからですしね。

星さんが決して弱い訳ではないですがもし何かあったら大変なことになるので・・・。

「はい。これは基本的に使わないので。」

「そうかわかった。ではいくぞっ」

”ヒュン”

と音をたて鋭い突きが俺を襲う

俺はそれを右手の黒天で起動をずらし、お返しとばかりに白光で袈裟斬りを放った

星さんはそれを後ろに跳んで避けた

「やはり飛鳥殿は、一筋縄ではいかないようですね」

そう言いながら星さんが今度は俺に鋭い乱れ突きを放ってきた
俺はそれを二刀でなんとか捌く

やばいっ！このまま受け続ければいつかはあたる

と思い俺は星さんの槍を強く弾き間合いを空ける

「星さんこそ、本当に鋭い突きですね。今度はこっちから行きますよっ！」

と言いつつ俺は二刀で連撃を繰り出す。

”キーン” ”キーン” ”ガァン” しかし星さんはそれを槍で防ぐこのままじゃ埒があきませんね・・・

「ハアッ！」

と俺は大振りの一撃を放った

しかし星さんはそれを横に避け俺の脇腹に向かって突きを放つ

俺はそれを黒天の柄で叩き下に大きく軌道を逸らす

俺はその隙に白光の速さを活かし星さんの喉に白光を突き付ける

「俺の勝ちですね」

と言う

あの趙雲に勝ってしまいましたね、さすがはチートですね・・・と考えていると

「やはり飛鳥殿は強いすな」

と言いつつ星さんは槍をおろす

「いや、結構ギリギリでしたよ」本当に・・・

などと話していると

「いや、お兄さんは本当に強いようでしたね」

と、程イクさんが言ってきた

あつ、そういえば程イクさんも見ていたんですね・・・

「酷いですね」お兄さんは風がいるのを忘れてたのですね」

あれ？心が読まれたっ！？

「読んでいませんよ、顔に出ていましたよ」

「そんなに顔に出ていましたか？」

「風は軍師ですからね」相手の表情を読みとることも重要ですからね」

そんなことができるんですか・・・軍師って凄いですね「そろそろ宿に帰るとしよう。」と星さんが言った

「そうですね、日も落ちてきたので帰りましょうか」
「そうですね」
と言い三人で宿に帰っていった

程イクSide

戦いをみて思った

星ちゃんは何処でも将の位を貰えるくらい強いんですね、
それに勝ってしまうお兄さんは何者なんでしょうかね、

それにまだ力を隠しているような気がしますね、

まあ、いい人そうなのであまり気にしないで大丈夫ですね、
今はお兄さんが敵に回らないことを祈るとしていきましょうか、
と飛鳥の顔を見ながら考え、三人で宿に帰っていった

Side Out

Side Out

宿に着き戯志才さんと合流をした「しかし飛鳥殿は嬉しそうだな」と星さんが言った

その通りである

俺は今少しテンションが上がっている、だって今まで野宿でしたからね布団があると思うとテンションくらいあがりますよ？

「飛鳥殿はそんなに私達と泊まるのが嬉しいのかな？」

と星さんが意地悪そうな顔で言う

「ハハハッ、まあそれもありますけど最近野宿続きだったので・・・」早く布団で寝たいですね、まあ星さん達みたいな美人な人と一緒に泊まれるのが嬉しいと言ったのも本当ですが・・・、と思いながら答えた

「ふむそうか・・・、からかい甲斐のない・・・」

最後のほうは聞こえなかったがそう呟き何故か残念そうな顔をする星さん

夕食を食べ自分の部屋でいると星さんと程伊くさんと戯志才さんが入ってきた

「どうかしましたか？」

と俺が聞くと

「なに、せつかなので皆で飲もうと思ってな。」

といい懷から少し高そうな酒とメンマをとりだす

「星殿！そんな高そうな酒とメンマはどうしたのですかっ！？まさ

かまた私達の路銀を使つたのですかつ！」

「い、いやつ、こ、これは村の人達が賊退治の礼にくれたものだ」
と少し焦りながら答える星さん

「また”って、何回か使つたことあるんですか？」

と俺が聞くと

「そうですね、星ちゃんも酒とメンマが好きでよく勝手に路銀を使つてかうので私達も困つてるのですよ」

と程イクさんが答えた

そういえば星さんは食堂で大量のメンマを食べてましたね・・・

「と、とりあえず飲もう」

と星さんが言う

「はあ、分かりました」

と戯志才さんは諦めたように言つた

そして俺たちは酒を飲み始めた

途中星さんに

「どうしてメンマが好きなんですか？」と聞くと1時間くらいメンマについて語られた

どれだけメンマ好きなんですか・・・

そして今は意外と酒にと強かつた俺とあんまり飲まなかつた程イクさん以外酔つて寝ている

星さんも酒に強いようでしたが、かなりの量飲んでましたからね、
と思いだしながら俺は酒を飲む

「そういえばお兄さんは何故旅をしているのですか？」

と程イクさんが尋ねてきた

「俺はもうすぐ来る乱世に備えて自分の士官する国を探しているんですよ」

と答えた

まあ、旅にでて数日しかたっていないんですが・・・

「そうだったんですか、私達と同じですね」

「程イクさんも何処に士官するか探しているんですか？」

「いえ、風と稟ちゃんは今もう士官するところは決まっているんですよ。」

と程イクさんは答えた

「何処に仕えるんですか？」

「風と稟ちゃんは今陳留の曹操と言う人ですよ。」

あの魏の霸王と呼ばれた曹操さんですか・・・もの凄く見る目がありますね

「あと、風のことは風と呼んでくれていいですよ。」

といきなり言われたので俺は驚いた

「えっ？俺なんか真名を預けてもいいんですか？」

と俺がきくと

「いいですよ、お兄さんはいい人のようなので。」

おおっ、俺っていい人に見えるんですね

「では、俺の真名は飛鳥です。」

「わかりました、お兄さんの真名を預からせて頂きますね。」

そうして俺と風さんは真名を交換した

そして次の日の朝

「では私達はこっちにいくので」「さらばだ、飛鳥殿また会おう」

「お兄さんとはここで別れですね、お兄さんの名前の旗が自分の陣で見れることを祈ってますね。」

と戯志才さんと星さんと風さんが言った

「星さん、風さん、戯志才さんありがとうございました。またあいましょう」

と俺は三人に別れを告げ歩きはじめた

また一人ですか、寂しいですね・・・

などと思いながら飛鳥は歩き続ける

「それにしても本当に何処に士官しましょうかね」
と飛鳥は呟いた

第七話（前書き）

期末テストが終わりました。

まあ、結果は察してください。

テストが終わったあとMHP3rd

やってて更新するの忘れてました。

本当にすみませんでした。

やっぱり駄文ですが読んでください。

第七話

星さん達と別れて十日たった

俺は今、山を歩き続けています

そしてかなりピンチですなぜなら・・・

「昨日から何も食べてないのでお腹が空きました……」
という訳です

「星さん達と別れてから結構歩いたんですが、どうして村が一つもないんですか……」

と呟きながら歩いていると

「兄ちゃん命が惜しけりや荷物をこっちに渡しな!」

と頭に黄色い布を巻いた人達が数十人出てきた

また黄巾党ですか……

あの村出てから10回以上襲われてますね……エンカウント率高くないですか?

「おい!聞いてんのか!?!」

俺のうる覚えの三国志の知識だと、そろそろ黄巾の乱でしたっけ?

「無視してんじゃねえ!」

と一人の黄巾党が斬り掛かった

俺はそれを軽く避け男の腹に回し蹴りを入れた

男は数m程吹き飛び気絶した

「今ちよつと考え事してるので邪魔しないでください。」

え……と確かその後は反董卓連合でその後は……

「な!?!て、てめえ皆やつちまえ!」

一人の男がそう言うのと全員斬り掛かってきた

「はあ、めんどくさいですね」

”シャリン”

俺は黒天を抜き黄巾党の武器を全て斬り裂き黒天の峰で全員気絶させた

これでやっと考え事に集中でき「おい、貴様」ませんね・・・
「まだ仲間がいたんですか・・・」
そう言いながら後ろを振り向くと褐色の肌に桃色の髪をした女の人と目つきの鋭い女の人が立っていた

S i d e 桃色の髪の女

私は今日、思春と一緒に気分転換に遠乗りに来ていた
しばらくすると一人の黒髪の男が黄巾党に囲まれているのがみえた
そして黄巾党は彼に全員で一斉に斬り掛かった

「思春、彼を助けるわよ！」

「はい」

そして私たちが助けに入ろうとすると彼は

「はあく、めんどくさいですね」と言いながら細い剣を抜き黄巾党の武器を全て斬り裂いた

そして黄巾党は全員気絶した

「凄い・・・」

私は彼の力量に驚いた

「連華様」私が少しの間呆けていると思春が声をかけてきた

「そ、そうね、とりあえず声をかけましょうか」

そして思春が声をかけた

「おい、貴様」

そう言う

「まだ仲間がいたんですか」

と言いながら振り向いた

どうやら私達は黄巾党の仲間に間違えられたようだ

「いや、私たちは黄巾党ではない」

「え？それは失礼しました」

男もこちらが黄巾党ではないことに気付いたようだ

「では、貴女たちは誰でしょうか？」

「私の名は、孫権だ」

「甘寧 興霸だ」

こちらが名を名のと男もなのった

「俺の名前は凌統 公績です。で、貴女たちはどうして声をかけてきたんですか？」

と微笑みながらたずねてきた

・・・格好いいわね／／／／はっ、そ、そうじゃなくて

「い、いや貴方が黄巾党に襲われてたので助けようとしたんだが・
・その必要はなかったみたいだが」

「そうでしたか、わざわざ助けようとしてくれたんですねありがとうございます
うございます」

そう言い男はまた微笑んだ

やっぱり格好いい・・・／／／／

「どうかしましたか？」

はっ、どうやら私は少し呆けていたようだ

「そ、それでなんだか私はこの辺りを治めているんだが黄巾党を倒してくれたいとお礼をしようと思っただけ」

「え？本当ですか！？なら良ければ少し食料を頂きたいんですが」

「ああ、それくらいのことなら、なら着いて来てくれ」

そうして私達は城に帰っていったSide Out

S i d e 飛鳥

「ご馳走様です」

いや、助かりましたね

黄巾党倒してご飯を食べれるなんて本当、黄巾党様々ですね

「助かりました。正直道がわからなかったですし、もう食料が底を
ついていたので」

「いや、黄巾党を倒してくれた礼だ気にするな」
と孫権さんが言った

「それよりお前は何をしてたんだ？」

と孫権さんが聞いてきた

「俺は何処かに士官しようと思つて旅をしてたんですよ」

「ならうちに仕えないか？」

「え？」

「さつき黄巾党を倒した時のお前の強さは凄かった。・・・それに
格好よかつたし／＼／＼。」

最後に何か呟いたようですが何でしょう？

若干顔も赤いような？

少し熱でもあるんでしょうか？・・・そんなことより呉ですか・・・
。

うーん、悪くないですね。

でももう少し旅もしたいので・・・

「俺はもう少し旅をしたいので、旅が終わってからじゃだめですか
？」

「ああ、全然構わない。お前みたいな強い奴が来てくれるだけでも
ありがたい。」

「なら旅が終われば呉に士官させていただきます。」

俺は笑顔でそう言った

「／／／／（格好いい・・・）」

何故か孫権さんは顔を赤くして固まってしまった

「あの、孫権さんどうかしましたか？」

「い、いえ、な、何もないわよ（貴方の笑顔に見とれてたなんていえないわよ／／／／）」

本当にどうしたんでしょう？

「そ、それよりもうすぐ日も暮れるようだし泊まって行くといい」

「いいんですか？」

「ああ」

やった、これで野宿をしなくて済みました
などと喜んでいると

「おい、すこし手合わせしないか？」

と今まで黙っていた甘寧さんが言ってきた

「そうね、貴方の強さもう一度しっかり見ておきたいわね」

と孫権さんまで言ってきた

はあ、仕方ないですね・・・

「いいですよ」

S i d e 甘 寧

私は今、凌統と対峙している

こいつの黄巾党を倒した時の武は驚いた。

その辺の将とは比べものにならない位の強さだった

こいつが呉に士官してくれると呉を天下に導いてくれそうな気さえした

そして凌統が呉に士官してくれることが決まった

が私もやはり武人、強者とは闘ってみたい

そして凌統に手合わせを申し込むと少し考え受けてくれた

・・・凌統の準備が終わったようだ

「準備はいいか？」

「はい大丈夫ですよ。いつでもどうぞ。」

凌統がそう言うてきたので私は凌統と距離を詰め首に向かって切り付けた

しかし凌統はそれを軽く避け、逆に剣で切り掛かってきた

「はあ！」

私はそれを避け今度は連続で切り付ける

しかしそれを全て剣で受け止められる

あれを苦もなく受け止めるか・・・やはり強い

そして私は一度後ろに大きく跳び距離をとった

そして再び距離を詰めさつきより速く斬りつける

”ギン”

しかしそれを凌統は片方の剣で受け止めもう片方の剣で私に突きを放った

私はそれを横に避けた

そして今度は凌統が連続で切り掛かってきた

”ヒュン”

と音をたて凌統の剣が私に迫る

速いっ！！

”ギン”

私はそれを受け止めた

「くっ」速い上になんて攻撃の重さだ

しかし凌統の攻撃はまだ終わらない

”ギイン” ”ギイン” ”ガンツ” 私は何とか攻撃を防いでいたが手が痺れ武器を弾かれてしまった

「これで俺の勝ちですね」

凌統がそう言った

「ああ、私の負けだ。」

私はそういった

Side Out

Side 飛鳥

いやゝ危なかったですね

甘寧さんいきなり首狙ってきましたからね

あれ避けなかったら確実に首と胴体が別れてましたよ

連撃の力押しでなんとか勝ちましたが危なかったですね

「凄いわね、まさか思春に勝つなんて」

と孫権さんが言ってきた

「いえ、かなりギリギリでしたよ」

と俺は言った

「大丈夫ですか甘寧さん？」

と俺は甘寧さんに声をかけた

「ああ、少し腕が痺れるが問題ない。」

とクールに返す甘寧さん

甘寧さんカツコイいですね・・・

と俺が思っていると

「思春だ」

「え？」

「私の真名だ。」

なんと甘寧さんが真名を預けてくれた

「そうね私の真名も預けるわ。私の真名は連華よ」

さらに孫権さんまで真名を預けてくれた

「なら、俺の真名は飛鳥です。よろしくお願いしますね。」

俺は満面の笑みでそういった

「／／／／／」

何故か二人とも顔が赤いような・・・まあ気のせいですね

「本当にありがとうございました。」

次の日の朝俺は門の前で二人に別れの挨拶をしていた

「ええ、貴方が呉に来てくれるのを待ってるわ」

と連華さんがいった

「はい。必ず行かせていただきますね」

「思春さんもお元気で」

と言うと

「ああ」

と短い返事だが返してくれた

やっぱりクールでカッコイイですね・・・

「では、また会いましょう。さようなら。」

そう言い俺は歩きはじめた

さて、これから何処に行きましようか？

そんなことを考えながら俺は朝日に照らされ進み続ける

第八話（前書き）

モンハン3rdをしたり、小説を何冊も買って読んだりしていると更新するのを忘れてました。

さらに冬休みの宿題も有るので今後の更新も遅くなるかも・・・。

でも頑張るので応援してください！

お気に入りに登録していただけたり感想を書いてくれると幸いです。

第八話

蓮華たちと別れて数日俺は山の中を歩いていきます

「次は何処に行きましょうか？」そろそろ適当に旅をするのはやめて具体的な目的地を決めないといけませんね・・・

洛陽はたしか都でしたっけ・・・「よしっ！洛陽に行きましょう！」そうと決まれば誰か人を探して道を聞かなければいけませんね

”　　”

「ん？人の声らしきものが聞こえましたね。とりあえずそちらに行ってみましょう。」

そして声の聞こえたほうに歩きはじめた

「　　」　　「　　」　　「　　」

「声の聞こえた方に来たのはいいんですがまさか戦の真っ最中とは・・・」

一方は黄巾党のようですね。もう一方は・・・義勇軍でしょうか？おそらく義勇軍は囷でしょうが少し押されぎみですね

さらに後ろから黄巾党の援軍が800程来ているようですね

「仕方ないですね。手伝ってあげますか！」

そして俺は戦場に向かって駆けていった

S i d e 義勇軍の将

私達は今、黄巾党と戦っている。

曹操殿の黄巾党を一網打尽にする策の準備のために私達は今囿をし
ているのだが

「くつ、いくら賊とはいえこれだけ数の差があればまずい」

鈴々たちの方も押されてきているようだ・・・

兵の士気も下がってきているようだ

曹操殿の策はまだなのか!?

私は、焦りながら敵を斬り裂いていく

「関羽様!」

声のした方を見ると伝令兵が血相を変えてこっちに走ってきている
「どうした?」

私が伝令兵に尋ねると

「こ、黄巾党のえ、援軍800がこちらに向かってきたとの報告で
す。」

「なに!?!」

まずい!

ただでさえ押され気味だというのに援軍だと!?

「くつ、曹操殿の策はまだなのか!?!」

くそつ、黄巾党の援軍がきたことにより兵の士気が大きく下がりは
じめた

万事休すか・・・

そう思った時

目の前に銀閃が駆け抜けた

そして三十人程の黄巾党の首が中を舞い、そして両手に二振りの剣
を持ち、背中に見の丈程の黒い剣を背負った男が立っていた

「我が名は凌統、お手伝いしますよ義勇軍さん。」

”ニコッ”

男がこちらに向かつて微笑みながら言ってきた

「／／／／／／」

「どうかしましたか？」

男が不思議そうに尋ねてきた

「い、いや、ななな、なんでもないんだ」

わ、私としたことが凌統殿の笑顔に見取れてしまった／／／／／

「そ、それより凌統殿、ご助力感謝する。我が名は関羽、字は雲長だ。」

正直かなり助かった

今は一人でも多く優秀な兵が欲しかったところだ
それにあの一瞬であれだけの数の黄巾党を倒すなんてかなりの武の
持ち主だ

「それでは関羽さん、俺は黄巾党の援軍の方を相手にしてきますね。」

「

そう言い男は黄巾党の援軍の方え走っていった

カッコイイ方だったな／／／／

はっ、そんなことを考えている場合ではなかった

そう思い黄巾党の援軍の方を見てみると完全に進軍が止まっていた

「あの数を一人でとめるのか・・・凄まじいな」

しかしこれでまだ耐えられる

「皆の者！我が方に一騎当千の将、凌統殿が味方についた！凌統殿
は今一人で800の黄巾党の援軍を止めている！皆も奮起せよっ！」

「『『『おおおお！！！！』』』」

凌統殿の武を見て、士気が再び上がった

これでまだ戦える

私も自分の武器を構え直し再び賊に斬り掛かった

そしてしばらくすると曹操軍が火矢を放ち横から騎馬兵が黄巾党に突撃していった

いきなりの火矢に混乱した黄巾党は瞬く間に騎馬兵に蹂躪されていた

こっちは終わった、凌統殿の援護に行かなければ

そう思い凌統殿の方を見てみると800いた黄巾党が残り100程度になっていた

「あの短時間であれだけの数を！？予想以上のつよさだな・・・」
彼は流れる様に黄巾党を斬り裂いていく

そしてその闘う姿はまるで演舞のようにとても美しかった

「それにしてもやっぱり・・・カッコイイ／＼／＼」

私は呟いた

S i d e O u t

S i d e 曹操

まずいわね

義勇軍を囿にしたのはいいけど援軍がくるなんて・・・

「くっ、皆の者！さらに急ぎ策の準備をせよっ！」

私は兵に声をかけ準備を急がせる

しかしいくら関羽や張飛がいるからといってそうあまり長くは持た

なでしょうね・・・

少し援軍を送ろうかしら

そう考えながら関羽たちの方を見ると、三十人程の黄巾党の首が中を舞った

「！！！」

そこには両手に剣を持ち背中にも身の丈程の長剣を背負った男が立っていた

あれだけの数を一瞬で・・・あの男気になるわね

男は関羽と少し話すと黄巾党の援軍の方へ走っていった

そして男は一人で黄巾党の援軍の進軍を止めている

「これならまだ持ちそうね」

私がそう呟いていると

「華琳様っ！準備が整いました！」

春蘭が報告にやってきた

「分かったわ」

この戦が終わればあの男、春蘭と闘わせてみようかしら？

そんなことを考えながら私は、馬に乗って戦場に向かっていく

S i d e O u t

S i d e 飛鳥

今俺はもっぱら賊と戦闘中です

いやゝ、しかしビックリしましたね

まさかあの黒髪美人さんがあの関羽だなんて

そんなことを考えながら賊をどんどん斬り裂いていく

「しかし賊はいえ人を斬るのはやっぱりいい気分ではありませんね・

・・」

肉を斬る感触がするたび、目の前で血が舞うたびに気分が悪くなってくる

「まあ、でも星さんや思春さんとの手合わせよりはましですね」

あれって結構気を遣うんですね。

相手は女性ですからあまり傷付けないようにしてはけませんし、この刀で無駄に傷付けないようにするの難しいんですね

「さて、さつさと終わらせましょうか」

そう言いさらに黄巾党を倒していく

・・・しかし何故黄巾党に向かっていくとき悪寒を感じたのでしょうか？

戦が終わわり今俺は義勇軍の天幕の前にいます

そしてこの義勇軍を率いているのはなんとあの劉備さんで、俺にお礼を言いたいそうです

そして少しすると

「凌統殿、入って来て下さい」

と関羽さんの声が聞こえた

「この度は、愛紗ちゃんを助けてくれてありがとうございます。」
と桃色の髪の女の人が頭を下げていた

「いえ、気にしないでください。」

俺がそう言つと

「あつ、私の名前は劉備 玄德です。」

女の人が自己紹介をしてきた

「俺の名前は、凌統 公績です。」

そして俺も自己紹介をした

すると関羽さんのすこし後ろにいた女の子達も自己紹介を始めた

「鈴々の名前は張飛なのだ。」 と赤髪の女の子が元気一杯に自

己紹介をした

えっ！？このちっちゃい子があの張飛！？

と内心驚いていると

「はわわ、わ、私の名前はしょ、諸葛亮 孔明でしゅ。あう、噛ん

じやいました・・・」

「あわわ、わわ、私の名前はほ、鳳統 士元でしゅ。あう、私も噛

んじやいました・・・」

なんでしょう、この可愛い生き物は？ものすごく抱きしめたい衝動
に駆られますね。

ん？諸葛亮に鳳統！？この子達が！？

本当にこの世界は不思議ですね・・・

俺がこの世界の不思議に驚いていると

「あつ！」

と劉備が急に何か思い出したように声を上げた

「どうかしましたか？」

と俺が尋ねると

「あ、あの凌統さんって昔、森で狼に襲われてる女の子助けません
でしたか？」

と急に聞いてきた

「え」と、・・・ああ、たしかそんなことがありましたね、でも

／」

「（飛鳥殿の笑顔カツコイいな・・・／／／／）」

「（ほえゝお兄ちゃんカツコイイのだ／／／／）」

「（はわわっ／／／／）」

「（あわわっ／／／／）」

「あの、皆さんどうしたんですか？」

「ふえ、な、なんでもないですよ／／／／」

と少し焦って答える

あつ、そういえば洛陽への道のりを聞かなくてはいけませんね
当初の目的を思いだし桃香達に道を聞こうとすると

「劉備様、曹操様が面会を希望しています。」

と槍を持った兵士が一人やって来た

「分かりました。通してください。」

と桃香がそう言つと兵士が天幕から出ていった

そして

「劉備、入るわよ」

兵士が天幕を出てから十秒程で金髪の女の子とその部下らしき水色の髪の女の人と眼帯をつけた黒髪の女の人が入って来た

第九話（前書き）

あけましておめでとうございます。

今年もこの小説をよろしく願います。

今回は、睡眠不足の中アルコールが入っているといった極限状態で書き上げたので一応確認したんですが誤字、脱字、後文章がおかしいかもしれません。

・・・文章がおかしいのはいつもどおりですね（笑）。

え、こんな小説ですがレビューしていただいたり感想書いてくれたりすると凄く嬉しいです。

これからも一生懸命更新していくので、応援よろしくおねがいします。

第九話

「劉備、さつきはすまなかつたわ。援軍がくるなんて思っていなかったわ。」

「言い金髪ロールの女の子が頭を下げる」

「い、いえこつちも曹操さんの策にのつたので曹操さんは悪くありませんよ。」

と少し焦りながら答える桃香

「そう。そう言ってくれるなら助かるわ。」

へへあれが曹操か、やっぱ女だけどそれなりの覇気があるな．．．
と思っていると

「それで、貴方かしら？黄巾党の援軍を一人で相手したのは。」

と曹操が俺を見る

「ええ、まあそうですが．．．」と俺が答えると

「貴方、名前は？」

と聞いてくる

「凌統といます。」

「凌統、私の物になりなさい。」「は？」

何言ってるんですか？

「あの人数を一人で倒すその力、気に入ったわ。」

いや、気に入ったとかじゃなくて初対面の人に私の物になりなさい
って、何処のがき大将ですか？

「えっと、遠慮します．．．」

と言うと

「貴様、華琳様の頼みを断るなっ！」

と叫びながら黒髪の人がいきなり切り掛かってきた

”ブウン”

「うわっ！？」

”ヒョイ”

「いきなり何するんですか!!」「貴様!避けるなっ!」

そんなの無理に決まってるでしょう!この人バカですか!?

「春蘭の一撃を容易く避けるなんて、ますます気に入ったわ。」

ますます気に入ったとか言っただけで早くこの人止めてくださいよ!!

その俺の願いが通じたのか数回切り掛かれた後

「春蘭止めなさい!」

と止めてくれた

「しかし!華琳様、あいつは華琳様の誘いを断つ「春蘭!」・・・
分かりました。」

曹操さんに怒られ黒髪の人も渋々剣をおさめたようだ・・・という
より誘い断っただけで殺されるってペナルティおかしくありません
か?

「凌統、すまなかったわね。」

と少し笑いながら謝罪してきた

絶対、すまなかったかと思っただけよこの人・・・

「本当にそう思っているなら、俺の力量測ってないでさっさと止めて
ください。」

下手したら死んでましたよ・・・

「あら、春蘭の攻撃を避けてる間にこっちを気にする余裕もあった
の?」

しまった・・・、さらに興味を持たれてしまいました

「え?そ、そそんなこと、あ、あああらへんよ?」

・・・焦り過ぎて関西弁になってしまいました

「・・・喋り方変になってるわよ?(分かりやすいわね・・・)」
と言いながら哀れみの視線を俺に送る

は、恥ずかしいノノノノ

動揺しているのが完全にばれてしまいました・・・桃香さん達まで
もが俺に哀れみの目で俺をみている

「あ、飛鳥さんは、う、嘘をつけない人なんですわ・・・」

朱里ちゃんがそう言った

「うつ・・・嘘もつけない無能ですみませんでした・・・。」

どんよりと暗いオーラを出しいじけながら言った

「え、い、いや、わ、私は正直でいいと思いますよ?」

と言っで慰めてくれる桃香さん・・・いい人です

「ほ、本当ですか? (ウルウル)」

と涙目で尋ねる

「ほ、ほほほ本当ですよ／＼／＼／＼ (涙目の飛鳥さん可愛い／＼／＼)」

「(うつ、飛鳥殿可愛い、何か守ってあげたくなってしまう／＼／＼)」

「(お兄ちゃん可愛いのだ／＼／＼／＼)」

「(はわわわわっ／＼／＼／＼)」

「(あわわわわっ／＼／＼／＼)」

「(なかなか可愛い顔するじゃない／＼／＼／＼・・・なんか虐めたくなるわね)」

桃香さんの慰めのおかげでなんとか立ち直れました・・・ん? 顔が赤い人が多いですね・・・はっ!? や、やっぱり見ていて顔が赤くなるほど恥ずかしいことなのでしょうか?・・・orz

「そ、それより、まだ自己紹介してなかたわね。私の名は曹操よ。
春蘭、秋蘭。」

曹操さんが改めて自己紹介をした

「私の名前は夏侯惇だ。華琳様に無礼なことをすれば叩き斬るぞ」
「私の名は夏侯淵だ。凌統、さつきは姉者が済まなかったな。」

どうやら黒髪の人が夏侯惇で青髪の人が夏侯淵らしい・・・めっちゃくちや有名な将じゃないですか・・・。俺そんな人に切り掛かられたんですか・・・俺いつ死んでもおかしくないですね・・・。

「で、凌統、私の所に来ないかしら？」

曹操さんが再び尋ねてきた

「あ、あの実は私も凌統さんに仲間になって欲しいな。」

桃香さんまでもが仲間にならないかと誘ってきた。

「うえ？桃香さんですか？」

俺、呉に仕える約束してるんですが・・・それに洛陽に行きたいんですけど。

「は、はい。飛鳥さん強くて頼りになるので仲間になってくれたら嬉しいですよ。」

そう言ってくれるのは嬉しいんですが・・・

「で、貴方は私と劉備、どっちにくるのかしら？」

曹操さんが覇気を出しながら聞いててくる

うつつ、怖いですよ曹操さん・・・

「い、いや、あの、その、大変申し上げにくいんですが・・・次に行く場所が決まっているので二人のお誘いを断らせていただきますが・・・」

「へえ、私の誘いを断るの？」

ああ、夏侯惇さんがものすごい睨んでますよ今にも切り掛かってきそうなんですけど

それに

「ええ、仲間になってくれないんですか？（ウルウル）」

こっちは涙目ですし・・・ちょ止めてくださいものすごい罪悪感に押し潰されそうになるんですけど

「お兄ちゃん仲間になつてくれないのか？」

鈴々ちゃん、ほんと止めてください。そんなキラキラした目で見ないでください

「いや、本当に行く所あるんで勘弁してください。」

と土下座しそうな勢いで頼みこむと

「うう、分かりました。」

桃香さんは分かってくれたようだ・・・曹操さんは・・・

「分かったわ。」

よかった分かつてくれたん「ただし」ですね・・・え？」

「春蘭に勝てば見逃してあげるわ。」

もうやだ・・・

「ふふふ、よし貴様を叩き潰してやる。」

うわぁ、夏侯惇さんやる気マンマンじゃないですか・・・orz

「はっ！？ここは？」

あれ？なんで天幕の外にいるんですか？なんで目の前で夏侯惇さんが剣を構えているんですか？

まさかorzしているときに連れていかれたんですか！？

「よし、勝負だ凌統！」

はあ、もうこの戦闘は回避不能のようですね・・・

「分かりました。正々堂々、勝負をしましょう。」

そして俺も黒天と白光を抜いた

「二人ともいいわね？・・・では始めっ！」

と曹操さんが言った

「はあっ！」

”ビュオン”

夏侯惇さんが突っ込んで来て俺に向かって大剣を振り下ろす

「え！？早っ！」

俺はそれを跳んでかわす

”ドゴオッ”

夏侯惇さんの大剣が地面をえぐる

いや、これ手合わせですよね？

殺し合いじゃないですよね？

あれ当たったら確実に死にますよ！

あれは、あまり受け止めないほうが良さそうですね・・・

”ブオン”

今度は横薙ぎに大剣を振るってきた

俺はそれを真上に跳んでよけそこから蹴りを放つ

”ガアン”

しかしそれは防がれる

蹴りの反作用で一度距離をとり今度はこっちから仕掛ける

一気に距離を詰め全身のバネを利用して二刀を同時に縦に振り抜く

”ギヤイン”

「くっ！」

夏侯惇さんがあまりの衝撃に少し顔を歪める

しかし攻撃の手は休めない

”ギヤイン” ”ギイン” ”ガアン”

夏侯惇さんは辛そうにしながらもそれを全て防ぐ

死角からの攻撃も全部防ぎますか・・・野生の勘とか言うやつでし

ようか？

「くっ・・・はあっ！」

連撃を力技で押し返す

そして俺に向かつて大剣を縦に振り下ろす

俺は白光の切っ先で剣の軌道を逸らす

そして黒天を横薙ぎに振るうが夏侯惇さんは後ろに跳んでそれをかわす

そして夏侯惇さんが大剣で袈裟斬りを放つ

俺は半歩下がり紙一重でよけ、夏侯惇さんが大剣を戻す前に大剣に黒天を振り下ろし大剣を上になせない

そして大剣を踏み付け夏侯惇さんの首筋に白光を突き付ける

「くっ、私の負けだ。」

そして夏侯惇さんが負けを認める

「驚いたわ。春蘭に勝つなんて。」

ふう、これでなんとか曹操さんの勧誘を断れますね

「ますます欲しくなったわ。」

「え？だめですよ約束したじゃないですか！」

「そうね、だから今回は諦めるわ。今回は。」

ええ？今回ってなんですか！？もしかして次があるんですか！？
などと一人で落ち込んでいると

「りよ、凌統！わ、わ私の真名は春蘭だ！」

えっと、これは俺に真名を許してくれたのでしょうか？

「凌統、あれで姉者はお前のことを認めたんだ。姉者の真名預かってやってくれないか？」

ああ、やっぱり真名を許してくれたんですね

「春蘭さん俺の真名は飛鳥です。」

”ニコッ”

「／／／／／」

春蘭さんどうしたんでしょう？顔が赤いようですね・・・ああ！結

構動きましたからね疲れてるんでしょう

「凌統、私の真名は秋蘭だ。」

今度は夏侯淵さんがいきなり真名を預けてきた

「いいんですか？」

と俺が聞くと

「姉者が認めたんだ、構わない」とクールに返す

「分かりましたよろしくお願いします秋蘭さん。俺も真名で呼んでください。」

”ニコッ”

「ああ／＼／＼（近くでみるとかなり端正な顔立ちだな／＼／＼）あれ秋蘭さんも少し顔が赤いような・・・まあ秋蘭さんも疲れてるんでしょう

「二人とも真名を交換したようね。私の真名は華琳よ。」

曹操さんも真名を預けてきた

「えっと、俺の真名は飛鳥です。」

”ニコッ”

「分かったわ／＼／＼（やっぱり顔立ちは整っているわね。）」

ん？華琳さんも顔が赤いような・・・この世界の人は顔が赤くなりやすい体質なんでしょうかねえ？

「飛鳥さん凄い強いんですね！」と少し離れた所で見ていた桃香さんたちが話しかけてきた

「ははは、ありがとうございます。」

はあ、それにしても疲れましたねーと思っていると

「飛鳥殿、私とも手合わせしてただけませんか？」

「お兄ちゃん！鈴々とも勝負してほしいのだ！」

と愛紗さんと鈴々ちゃんが言ってきた

も、もうだめ・・・

あの後結局二人と勝負させられてしまった

本当に死ぬかと思いましたよ。綺麗なお花畑とかも見えて来ましたからね

そしてなんやかんやあつて次の日です

え？なんやかんやつて何？ですか？色々あつたんですが作者がゴミなので書けなかったんですよ

えゝと気を取り直して次の日ですいま別れの挨拶の真っ最中です

「飛鳥さんありがとうございました。飛鳥さんまた会えますよね？」

と桃香さんが少し涙目で言ってくる

「はい。また会いましょう。」

と俺は答える

「飛鳥、私は欲しい物は絶対に諦めないわよ。」

と華琳さんが言う

「あゝ、お手柔らかにお願いしますね？」

いやゝ本当に諦めて欲しいですね・・・

そろそろ行きましょうか

「では皆さん、俺はもう行きますね、また会いましょう。」

そう言い俺は歩き始めた

次は洛陽ですねゝ。ちゃんと道を聞いたんで今度は迷わずに済みそうですね。

そんなことを考えながら歩き続ける

しかし彼女達との再開は案外早く来ることになる
敵として戦場で・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4091p/>

真・恋姫†無双～転生者観察日記

2011年1月2日11時38分発行